

【問題】

文化財を1つ取り上げて詳しく説明し、それについて研究することの意義を、600字～800字で述べなさい。

【出題意図】

受験者の文化財に対する知見と学びへの意欲について把握する。

【解答例】

和歌山県立博物館が所蔵する日光社参詣曼荼羅は縦148.7 cm、横117.8 cmを計るやや厚手の紙に鮮やかな泥絵の具で高野山麓の日光社の景観を描く。近世まで日光社の祭祀に深く関わった小松家に伝来した。現状では掛幅装となるが、もともとは未使用時には折りたたんでいたことが痕跡からわかり、本来は縦八つ折、横四つ折にし、折りたたんだ大きさはおおよそ縦32 cm、横20 cmほどとなる。使用頻度は高かったようで折り目の角付近で欠損部がみられる。

画面中央に社殿三棟を描き、その向かって右に正面四間の堂舎、左に正面三間の堂舎を配置し、これらはすべて檜皮葺として描いている。この五棟は瑞籬で区画し、中央に鳥居を配置する。瑞垣の外には、左方より多宝塔を描き、その前方に板葺の堂舎、鳥居、鐘楼、茅葺建物を描く。さらにその下に、左側に堂舎と小祠を、中央に茅葺の建物六棟を描き、最下部に川を描いている。

描かれている総数41名の人物は、社頭では僧侶と神人、瑞籬中央の鳥居の中に巫女を描き、瑞垣の外にも僧侶が散見されるほか、宗教者や巡礼者、芸能者など聖俗の参拝者を描いて賑わいを表している。上部には三つの峯が描かれ、各々雲で区画されて、象徴的な印象を強めている。画面上部左右両端には、各峯の注記と見られる墨消し部分があるが、下部の文字は赤外線撮影でも読み取れず不明である。

形式化の見られない伸びやかで自由な人物表現が、清水寺参詣曼荼羅や長命寺参詣曼荼羅など16世紀に制作された参詣曼荼羅に通じ、本図の制作時期も室町時代後期と捉えられる。参詣曼荼羅を用いた勧進が地方社寺でも本格的に行われていたことを示す重要資料といえる。

個人の所有として伝来したが、その永続的な保存を図るため、和歌山県立博物館に寄託されたのち、寄贈された。勧進のために製作されたこと、日光社祭祀に関わった家で継承されたことが把握され、地域史理解の上での重要性から県指定文化財への指定とともに安定的な保管と継承が図られたものであり、調査、研究と保存を一連のものとして捉えて継承する文化財学の意義を強くうかがえるといえる。